

経済・金融 フラッシュ

2月マネー統計：

リスク回避姿勢は未だ強い、現金が約5年ぶりの伸びを記録

経済調査部門 シニアエコノミスト 上野 剛志

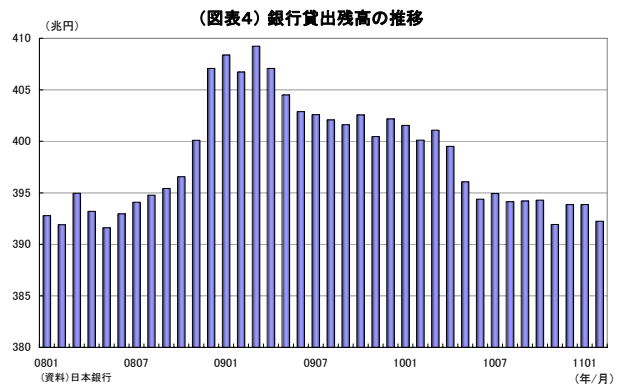
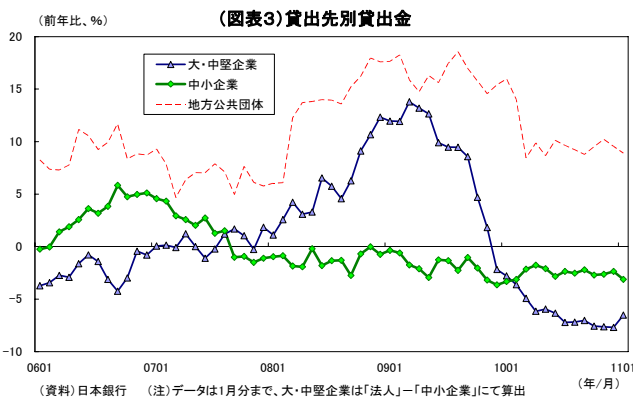
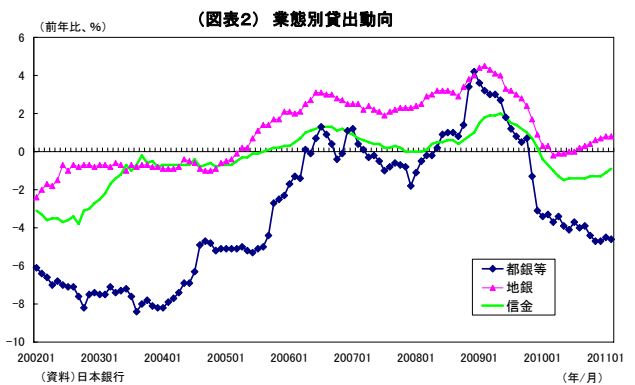
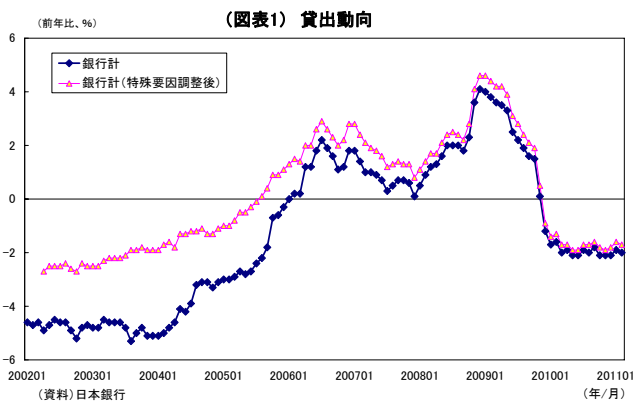
TEL:03-3512-1870 E-mail: tueno@nli-research.co.jp

1. 貸出動向： 銀行貸出残高は対前年▲2.0%

日銀が発表した貸出・資金吸収動向等によると、2月の銀行総貸出（平残）の前年比伸び率は▲2.0%と前月の同▲1.9%から若干マイナス幅が拡大、15ヶ月連続の前年割れとなっている。

内訳では、底堅い地銀と大幅マイナスの都銀という二極化構造が続いている。地公体向け等の伸びに支えられた地銀（第2地銀含む）では前年比 0.8%増（前月も同じ）とわずかながら増加傾向が続いている一方、大幅なマイナスが続く大企業向け貸出の影響を受けやすい都銀等では同▲4.6%（前月は同▲4.5%）と改善の兆しが見えない（図表1～4）。

企業の設備・運転資金需要は依然として力強さを欠いており、手元資金が積みあがっているため、前年比反転にはまだ時間がかかりそうだ。



日銀による「成長基盤強化を支援するための資金供給」(研究開発や環境などの分野への投融資に取り組む金融機関に対して、日銀が年 0.1%の低利で資金を供給するもの)の第3回目が2月末に実施された(日銀からの資金供給は3月上旬に実行)。今回の対象先は122 金融機関と前回から16 増加したが、一部大手行で1行当たりの上限(1500 億円)に達したため、供給額は7221 億円と前回から28%減少した。

今回の対象は、10~12月に行われた122 金融機関の投融資7806 億円であり、1件当たり平均金額は1.7 億円(前回は2.4 億円)と引き続き小口化した(図表5)。対象投融資の分野別累計投融資額は、最大の環境・エネルギー分野が全体の3割を占め、以下、医療・介護、社会インフラと続いている(図表6)。

同枠組みは12年3月の期限まで四半期に一度実施される予定(資金供給実行期限は同年6月末)だが、既に累計額は2.2兆円と資金枠3兆円の7割強まで利用が進んでいる。今後、資金枠拡大の動きが出てきそう。

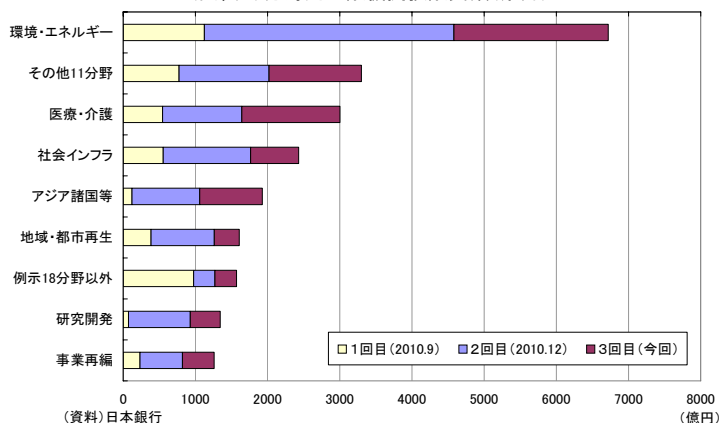
同枠組みの活用は順調に進んでいるが、銀行貸出全体に盛り上がりはみられず、日銀が言う“呼び水”効果はなかなか確認できない。また、一部大手銀で既に上限に達していることから、枠の拡大がなければ、大手銀と地銀とで今後の取り組み状況にも差が出てくるだろう。

(図表5)成長基盤強化のための資金供給 結果概要

	貸付 予定額 (億円)	貸付先金 融機関数 (先)	対象 投融資額 (億円)	1件当り 平均金額 (億円)	平均期間 (年)
第1回(2010.9)	4625	47	4788	3.6	8.2
第2回(2010.12)	9983	106	10564	2.4	5.8
第3回(今回)	7221	122	7806	1.7	6.3

(資料)日本銀行

(図表6)分野別金融機関投融資額(累計)

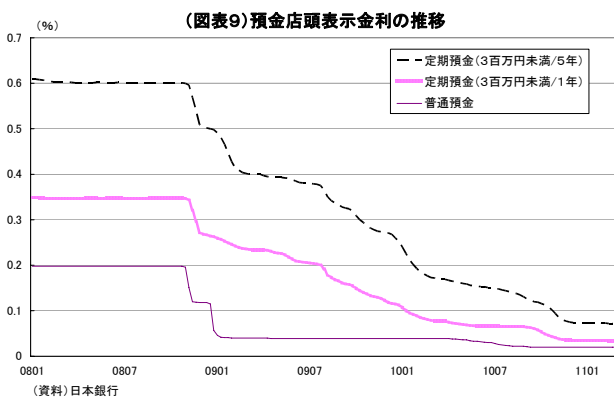
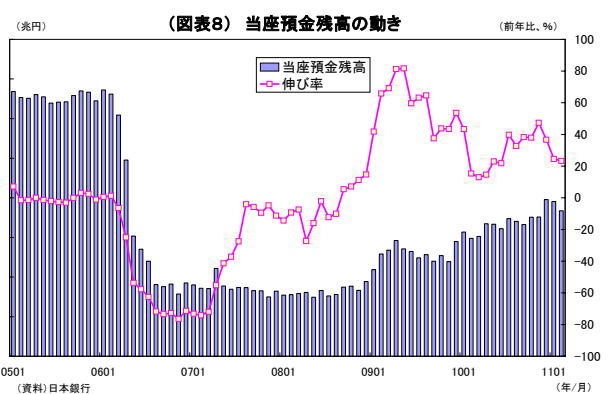
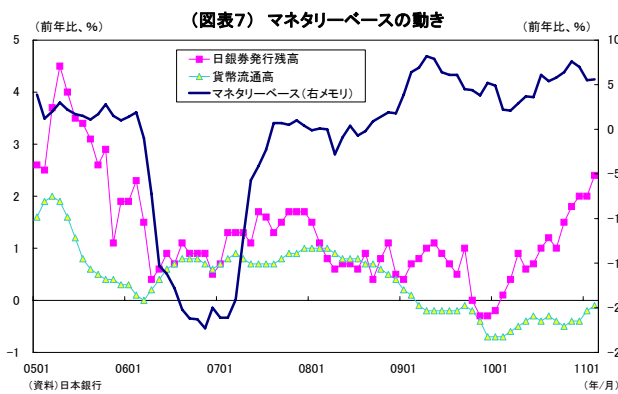


2. マネタリーベース：資金供給量は3ヶ月連続で100兆円を突破

日銀による資金供給量を示す2月のマネタリーベースの伸び率は前年同月比5.6%と、前月の同5.5%からやや上昇し高い伸びとなった。前年比プラスはリーマン・ショック以降2年6ヶ月連続で、残高についても3カ月連続で100兆円を超過している。

日銀が「包括緩和」などによって潤沢な資金供給を継続していることから、日銀当座預金残高(同23.3%)の高い伸びが続いている。これに加えて、日銀券発行残高の伸びも前年同月比2.4%と05年10月以来の高い伸びを記録した(図表7~10)。

日銀は引き続き潤沢な資金供給スタンスを維持していくとみられ、今後ともマネタリーベースは高い水準で推移していくと思われる。



(図表10) 資産買入等基金の状況(1月末) (億円)

	買入限度額(注1)	1月末残高	進捗率
資産買入	50,000	16,145	32%
国債(注2)	15,000	4,508	30%
国庫短期証券	20,000	8,997	45%
CP等	5,000	1,166	23%
社債等	5,000	1,021	20%
ETF	4,500	431	10%
REIT	500	22	4%
新型オペ	300,000	256,304	85%
合計	350,000	272,450	78%

(注1)買入限度額は2011年末までの概数(程度)

(注2)従来から行われている国債買入月額1.8兆円分は上記に含まない

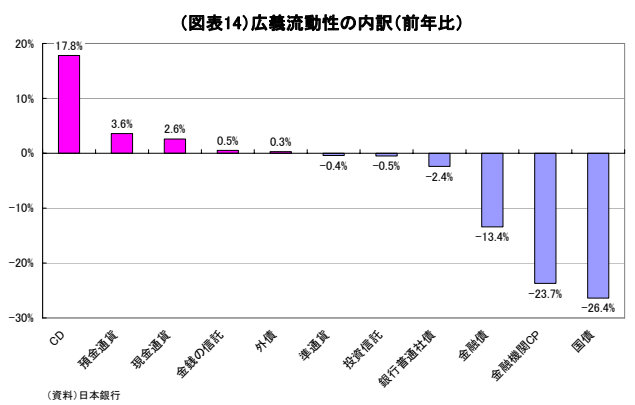
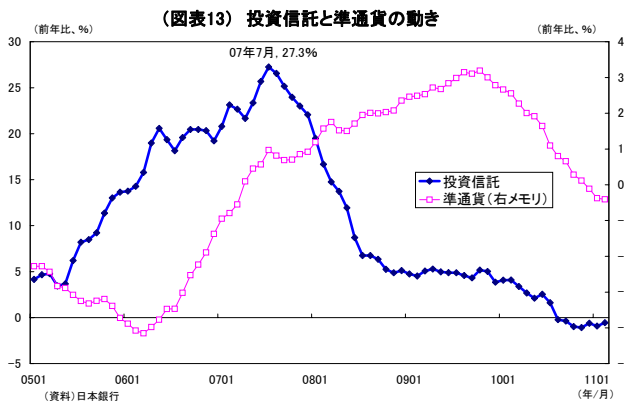
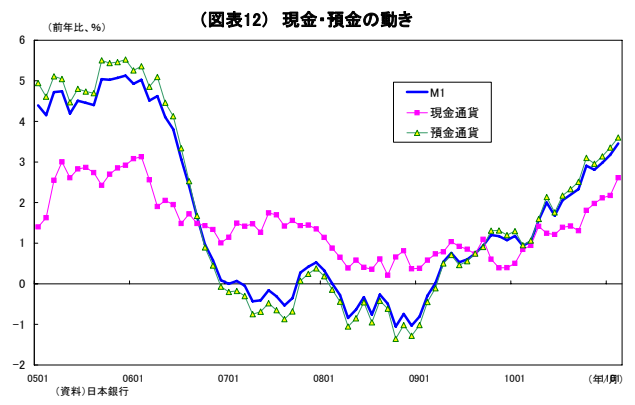
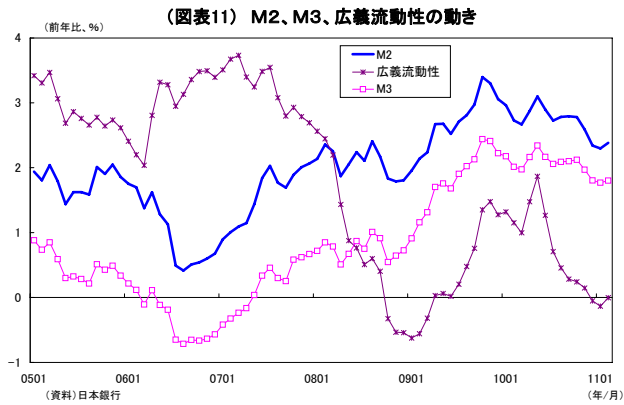
3. マネーストック：現金が4年11ヶ月ぶりの伸び率を記録

通貨供給量の代表的指標である2月のM2(現金、国内銀行などの預金)平均残高は前年同月比2.4%増(前月は2.3%増)、M3(M2にゆうちょ銀など全預金取扱金融機関の預貯金を含む)は同1.8%増(前月も同じ)と各増加した。一方、M3に投信や外債などを含めた広義流動性は同0.0%(前月は同▲0.1%)で前年比横ばいとなった(図表11)。

広義流動性の内訳を見ると、CD(譲渡性預金)や預金通貨(当座・普通預金等)、現金通貨などが対前年でプラスとなっている一方、定期預金などの準通貨や投資信託、債券などは低迷している。特に広義流動性の約35%を占める預金通貨(対前年3.6%増)と現金通貨(同2.6%増)ではここ

数ヶ月の伸び率上昇が著しく、各4年8ヶ月、4年11ヶ月ぶりの高い伸びとなっている（図表12～14）。

低金利で固定金利ものの魅力が相対的に低下している影響もあるが、家計・企業のリスク回避姿勢は未だ強いようだ。



(お願い) 本誌記載のデータは各種の情報源から入手・加工したものであり、その正確性と安全性を保証するものではありません。また、本誌は情報提供が目的であり、記載の意見や予測は、いかなる契約の締結や解約を勧誘するものではありません。